

『正法眼藏隨聞記』の一考察

末 光 愛 正

一 「俗猶如是」について

『正法眼藏隨聞記』中には、「俗猶如是」の表現が、常套語として使用されている。例えば、

一日示云、俗人ノ云、何人カ厚衣ヲ欲セザラン、誰人カ重味ヲ食ラザラン。（中略）俗ノ賢ナル、猶如是 仏道豈不_レ然（後略）
（長円寺本 五の五）

とある。これは俗人でさえ衣食に耐え忍んで修行すれば、徳を慕われる。この為現在の仏道者も、努力して発心修行することを勧める説示である。

この「猶」「猶……況……」等の表現形式は、まずあることを軽く抑え、次にあること（重要な方）を掲げて文章を強調する「抑揚形式」である。この場合、軽く抑えるのは俗であり、重要な方を掲げるのは出家者に対してである。道元禪師は何故に、「俗猶如是」と常に好んで表現し、又何を主張し様としたのであろうか。

二 「俗猶如是」の説示対象者

「俗猶如是」と世俗の道徳原理を頻繁に引用するが、『隨聞記』は出家者中の誰の為に説示するのであろうか。先の例（五の五）では、

古ヘモ皆ナ苦ヲシノビ、寒ヲタヘテ、愁ヘナガラ修道セシ也。今ノ学者、クルシク愁ルトモ、只強テ学道スベキ也。

と、出家者中の「今の学者」に対する説示内容である。又例えば、

夜話云、古人云、「朝ニ聞_レ道タニ死トモ可也。」今学道ノ人、有_二此心_一スベキ也。（三の十三）

と、これも「今学道人」に対するものである。

又『隨聞記』中には、「学道ノ人」「学人」「学道ノ納子」等の語句が、頻繁に使われることも一つの特徴である。例えば、

又、マコトノ賢人ハ、猶賢ノ名ヲカクシテ、俸禄ナレバ使用スル

ヨシヲ云。俗人猶然リ、学道ノ納子、私ヲ存ズル事ナカレ。(後略)(六の三)

と、「学道ノ納子」に対し、「俗人猶然リ」と叱咤激励している。この例等には「今」の字がないが、「今学道ノ納子」「今ノ学者」と同義と見てよいと思われる。この様に考えた時、何故に今の学者に対し「俗猶如是」と、世俗の道德原理を引用するのであろうか。

三 「俗猶如是」の説示動機目的

この問題に対する第一の解答は、道元禪師の仏教界の墮落・衰退に対する危機感である。例えば「俗猶ヨキ人」は猥談などしない。「況ヤ僧ハ」尚更の事で、猥談などせず仏道に励む事を述べた後、

近ゴロ七八年ヨリ以来、今出ノ若人達、時々談也。存外ノ次第也(二の十四)

と、建仁寺の若人達が、近ごろ猥談する風潮を戒めている。又近頃の建仁寺の僧が、美服・放逸の言葉等を好み、仏法が墮落して行く様子を見て、「仏法陵遲シ行コト眼前に近シ」「余所モ被ニ推察ニ也」(四の四)と慨嘆されている。以上の例だけから見ても、道元禪師の目には、当時の仏教界が、墮落衰退する様に見えたことは確実で、これに対する危機感が、「俗猶如是」と世俗の道德原理を引用する結果になったと思

われる。

第二の解答は、末法觀の否定にあると考えられる。例えば、示云、仏々祖々、皆本ハ凡夫也、凡夫ノ時ハ、必ズ惡業モアリ、惡心モアリ、鈍モアリ癡モアリ。然ドモ、皆改タメテ、知識ニ從ガヒ、教行ニ依シカバ、皆仏祖ト成リシ也、
今ノ人モ然ルベシ。我ガ身ヲロカナレバ、鈍ナレバト、卑下スルコトナカレ。今生ニ發心セズンバ、何ノ時ヲカ待ベキ。好ムニハ必ズ得ベキ也(一の十三)

と、今ノ人の劣根思想に対する否定である。又同様な例には、示ニ云、有人ノ云、「我病者也、非器也。学道ニタエズ。(一の二)と「非器」感に対し、「古人豈皆上器ナランヤ」と、末法の劣根思想を否定し、「發心修行スル、学道ノ最要ナリ」と結んでいる。又例えば、今は末世で、人の生れも劣っている「末世下根思想」に対し、外典の文を引いた後に、

只隨分ノ賢ヲ用ルノミ也。俗猶有ニ此義、(僧)又如是ナルベシ。況ヤ又仏(二の十三)

とある。ここで外典を引用して「俗猶有ニ此義」と云うのは、末法觀を抱いた当時の僧に対する戒めであり、又世俗の道德原理を以て末法思想を否定し、發心修行することを求めたものである。

第三の解答は、天童如浄禪師の影響が多分にある様に思われる。例えば(三の二十)には、如浄禪師が居眠り坐禪をして

いる僧達に対して、

僧堂裏ニアツマリ居シテ、徒ニ眠リテ何ノ用ゾ。然バ何ゾ出家叢林スル。不見麼、世間ノ帝王官人、何人カ身ヲヤスクスル。王道ヲ収メ忠節ヲ尽シ、乃至庶民ハ田ヲ開キ鋤ヲトルマデモ、何人カ身ヲヤスクシテ世ヲスゴス。是ヲノガレテ叢林ニ入テ、虚ク過シ時光ニ畢竟ジテ何ノ用ゾ。

と叱咤している。この叱咤の方法は、世間の帝王・官人・庶民の「世俗の道德原理」を引用して、僧を戒めている。これは『隨聞記』中屢使用する「俗猶如是」と同一内容である。

しかもこの様に叱咤激励する動機目的は、

仏法ヲ行ゼズ、眠臥シテ虚過シ時 尤愚也。故ニ仏法ヲ衰エ去也。

と、同じく仏法衰退に対する危機意識である。この様な如淨禪師の考え方を、

如是道理ヲ以テ、衆僧ヲススメテ坐禪セシメシ事、親ク見之也、今ノ学人モ、彼ノ風ヲ思ベシ

と、道元禪師が直接体験し、更に如淨禪師の家風を継承する事を述べている。この例から推測するに、道元禪師の「今学道ノ人」に対する求道心の厳格な要求や、仏道の衰退に対する危機意識は、師の影響が多分にあるのではないかと考える。

結 言

和辻哲郎博士は、『沙門道元』の中で、

彼が「俗なおかくの如し」として僧侶に訓える美德は、すべて儒教の徳であつて、彼はそれを仏徒にもふさわしいと見るのである（『正法眼藏弁道話・正法眼藏隨聞記』古典日本文学全集 筑摩書房 三五四—五頁）。

と述べられている。「ふさわしい」とは、「あるものが他のものとつりあっている」意味で、この場合には、仏教と儒教の徳である。しかし「俗猶如是」の内容は、①世間と出世間を区別している表現であり、②これは当時の仏教者に対する叱咤激励であり、仏法衰退に対する危機意識と、末法劣根意識の否定にある様に思われる。

この為に、俗人の世界の道德原理を峻別しながらも借用し、俗人でさえもこうなのであるから、ましてや更にすぐれた出家者は、更に努力精進すべき事を説示したものと思える。この故に、儒教の徳を引用する事を以て、直ちに仏徒にもふさわしいと解釈し、「不徹底な立場」と考える事には、問題がある。（以上の詳細は、『駒沢大学大学院仏教学研究会年報第十六号掲載予定）

（駒沢大学大学院修了）